midorinodam.jp

NPO法人
緑のダム
北相模

１１月号の１枚：嵐山、雨でもめげない中学生

［巻頭言］若者が教えてくれる事

子供達が自然の息吹きと触れ合いを感じる森へ

当会会員には30才代の森林に真剣に取り組む林業者がいます。その林業者Ｍさんは、休みを活用して遠く三重県から参加してくれるフォレストノバＯＢのＮさんと似た話をしてくれました。「自分は九州の某森林組合が皆伐した後、補植をしないで放置し禿山にしていると言う話を聞いた事が有ります。その後、改善されたようですが、そんな事にしたら森林の循環性が失われます。森には、再植しなければ森林の持続性が保てません。真夏の幼樹の周りの下草刈り作業が必要です、そりゃもう灼熱地獄です。その経験から、朝２時起きで手元が見える５時頃に現場に入り、12時には仕事を切り上げるようにしています。急峻な地形の日本の森では機械が入りません。この作業は、肉体作業しかできまん。辛い仕事です。木を伐り出して上手に商売すれば儲かります。でも、儲けだけを目的とする人間にはなりたくありません」。

また、彼は言う。「日本の産業の中で林業の事故率はダントツです。賃金は最低です。どうしてこう言うことになったかを考えて欲しいです。森林率世界第三位、国土の68%もある森林資源を何故、生かせないのでしょうか。北欧・中欧では林業は，高売上・高利益を出していると聞いています」。

＊「急峻な日本の森林では林業機械が入りません」、と言う彼の言葉は本当だろうか。急峻と言う意味ではオーストリアの地形は日本の森林地形に酷似しているのに森林・林業売り上げは面積当たり日本の30倍だと言う。銭ゲバに走った日本の経済システムが、森林の将来を心配して林業を志す真面目な若者たちを苦しめてないだろうか。

石村　黄仁（本会、代表理事）

今月の定例活動

2013.11

11月 3日（第一日曜日）：
小原本陣の森/森林整備、担い手育成、技術向上。
持続的森林経営：弁当持参。参加費：４００円
11月17日（第三日曜日）：
相模湖・嵐山の森/里山交流、多様な森林活動。
主食・自分のお椀・箸・飲料水は持参。参加費：４００円

FSC
www.fsc.org
FSC® C006376
責任ある森林管理のマーク

[定例活動]小原本陣の森

10月6日（第一日曜日）

強い日差しで私達を元気付け、背を押してくれていた太陽が段々とその手を休め、優しく見守るような暖かい日差しをくれる季節になってきました。そのような日の下、今回の小原での定例活動では、完成した東屋付近の景観間伐をさせていただきました。

午前中は方法を教えて貰いながら全員で間伐を行い、午後からは玉切をした材を運ぶ班と間伐をする班に分かれて活動をしました。目標では10本の木を間伐する予定が実際には4本しか間伐出来なかったり、玉切した材が他の材を運ぶ途中で斜面に落ちてしまったり、ロープが解けなくなったり木が掛かってしまったりと、色々なトラブルがありました。次回は今回の反省点を活かし、もっと素早く安全な活動が出来ればと思います。

私が今回の活動で感じたことは、生きているものの思いと、その力です。それを教えてくれたのは、最後に伐った掛かり木でした。私はこの木をみて、木と木が支えながら会話している様に感じられました。思いは目に見えるものでもなければ、化学で証明する事も出来ません。だから、その木にもし感情があったらと勝手に想像する事は間違っているという人もいるでしょう。それでも私は木にも思いは宿り、何かしらを感じていると思うのです。

今回の木も重たい木の幹の体重を細い枝が支え、その枝は幾らロープを使って木を揺らしても折れる事はなく、ついにこの日中に倒す事は出来ませんでした。この木が枯れていたとしても倒すことは大変なことだったでしょう。しかし、この木が最後まで倒れなかったのは、この森が生きていて、木の生きようとする力があったからです。だからこそ枝は折れず、最後まで木を倒すことが出来なかったのだと思います。

この生きようとする力、これも木の「生きたい」という思いがあるからこそ出てくる力なのではないかと私は考えています。

木も、虫も、人も、皆体のつくりも生活の仕方も全く違うけれど、皆生きている事には変わりはありません。その生きようとする生き物の力はとても強く、関わった自分以外のものにも影響を与えます。私は今回の活動でこの事について改めて考えさせられました。

私達が生まれる遥か前から生き、私達をずっと支えてきてくれた木々にもっと色々なことを教えて貰い、いつか恩返しが出来る様になりたい。私は今回の活動で改めてそう思ました。その気持ちを忘れずに今後も活動をしていきたいです。

川崎　茜音
（Forest Nova）

[定例活動]相模湖嵐山の森

10月20日（第三日曜日）

先月に引き続き今日も雨。だが、驚いたことにJR相模湖駅には78名ものメンバーが集まった。こんな悪天なのにどうして？

とはいえ、このことを予想して桂北公民館の部屋を予約しておいたのは正解だった。メンバーの半数は公民館での勉強会、もう半数は雨降りしきる嵐山へ。

公民館では石村さんに用意して戴いたDVD、時間が余れば私のパソコンに入っている映像を披露する予定であったが、急遽変更。臨時講師として写真家の滋澤さん、大工の長谷川主水さんに登場して戴いた。

まずは滋澤さん。現在、縄文土器をテーマとして各地で写真展を開催されている。作品は効果的に光を当てることで、土器の持つ神秘的な力をより一層際立たせたものとなっている。「縄文人もおそらくそれを計算して土器を製作したのではないか。彼等は選ばれた特別の人間ではないが、光に対する繊細な感受性を持っていた」。さらに「私は祭の世界のエッセンスとして能面を題材としてきたが、民衆の精神世界を突き詰めていった結果、縄文の世界に行きついた。ここには森を中心とした日本文化の原点があり、その精神は現在まで日本人の心に脈々と息づいている」とも。写真家の熱のこもった講義に皆、思わず吸い込まれてしまったようである。

一方、長谷川さんは日本の伝統的な工法にこだわる大工さん。

わが国が地震国であることを前提に、現代のプレカット工法との強度の違いを実際に材を組み立てながら解りやすく説明して下さった。「ほぞ」は材との組み合わせ、クギは材との摩擦で支えていること。土台が大きければ「ほぞ」も大きくしなければならないこと。伝統工法では大地震の際、壁→くさび→こみせんと弱い所から順番に崩れていき、地震の力を吸収していくことが大事であるとのこと。普段はなかなか知ることのできない建築の奥深さを垣間見たひとときであった。長谷川さんには今後、MOMA工房の隣に搬出した材の仮置き場をつくって戴く予定。「手間はかかるが、出来る限り丸太でつくっていきたい」との意欲を示して下さった。

石村さんのDVDも私の映像もともに空振りに終わった。しかし、そのことが爽快に感じられるほど中実の濃い勉強会。それにしても嵐山に集まるメンバーは何と多士済々なのだろう。

ところで、嵐山組は？　森林整備班は雨の中チェーンソーの整備と伐採木の選木。日大・丸山研究室の学生は毎木調査の実習、高井戸中も雨と格闘しながら作業を進めた模様。フォレストノバは新人のための森林案内、それを兼ねての森の様子見、さらにネイチャーフェスティバル、小原本陣祭（１１月３日開催）に使用する材の準備に余念がない。４時半頃まではかかるとのことだった。

雨にも負けず、風にも負けず。先月に引き続き緑のダムの真骨頂を見た思いである。

内野　郁夫（本会、理事）

[報告１]
間伐材仮置場について

10月20日

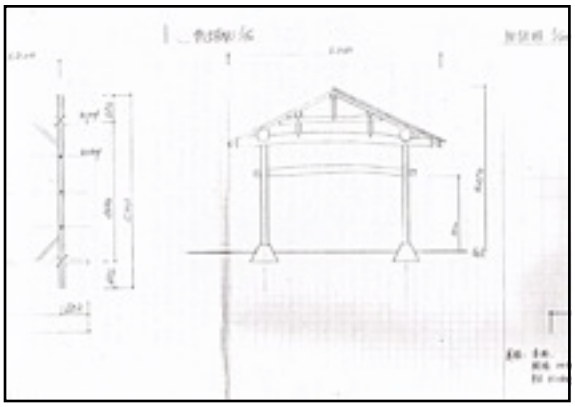
間伐は初期段階では、欠損木や劣勢木を中心に行われます。その後は次第に優良木も間伐の対象になります。この段階の間伐材を無駄にするわけにはいきません。間伐材があるからすぐに何か造れるわけではなく、しっかり乾燥させ製材して、さらに乾燥させて置かないと、欲しいときに欲しい木材になりません。市場では強制乾燥が一般的ですが、乾燥具合によっては刃物が、特に手作業の鑿（のみ）や鉋（かんな）の刃が立ちません。やはり、低温乾燥か自然乾燥が必要です。

以上の事から間伐材を山の中に放置するのではなく、せめて雨露のしのげる「仮置き場」を確保したいと考えてきました。桜井先生や宮村先生のご支援で、22世紀やま・もり再生ネットから予算がいただけることになり、「間伐材仮置き場」が可能になりました。

さらに、その具体化を進めるきっかけは、プロの大工さん、特に伝統構法にこだわって建築を手掛けておられる、長谷川さんが会員になられたことによります。大きさは２間（約3.6m）×4間（約7.3m）ですが、皮むき後の丸太から製材後の木材を、保管乾燥を出来るようになります。

間伐後はその現場で、約半年間自然乾燥（葉枯らし等）後、仮置き場の近くの貯木場に移動し、井桁積みで露天乾燥させたり、皮むき後仮置き場へ保管出来ます。

間伐材は利活用計画により製材して、仮置き場天井裏で保管乾燥します。ここまで約1年かかりますが、回転始めるといつでも必要な木材が使えることになります。製材するときに発生する木くずや鉋屑は、「バイオマストイレ」（設計中）に活用し、木端や皮は小物木工に活用できます。現在提出中の「着手申請」がＯＫになり次第建設に着手しますが、丸太にこだわって、基礎もない壁なしの建物は、伝統構法の支援がなければ実現できません。 伝統構法はほとんど釘や金具を使わず、「ホゾ」による「木組み」がベースになります。この「ホゾ」を手刻みにする作業を、多くの皆さんに体験をしてもらいます。 毎回活動日の参加者の中から、各グループの希望者交代で２～３名、合計で１０名程度に、ホゾやホゾ穴を ノコギリとノミで、



現在検討中の設計スケッチ

手刻みの体験をしてもらいます。専門的に体験したい方には、さらに難しい「墨打ち」や「製材」をも、習得していただきます。これらの指導を、プロの大工さんや建築専攻の大学生にお願いします。

手刻みや屋根材などの機材がそろったところで、「棟上げ」という大仕事が待っています。１０m近い丸太を４m近くの「棟」に持ち上げるのに、レッツカー車など使いません。これには森林整備で鍛えた「ロープワーク」を使います。完成がいつになるかは今のところ予想もつきませんが、より多くの皆さんが、この仮置き場建設に関わることで、森林整備活動から、森林の利活用活動へと、さらに林業復活への活動になることを祈念しています。

斎藤　憲弘（本会、理事）

[報告２]
森を守るために

私たちForestNova☆が、森と人との共助共生を目指し活動を始めてから、早八年が過ぎようとしています。四年で終わる学生生活の中で、ただひたすら森を良くするために、活動を、思いを引継ぎ、続けてきました。その中で一番大切にしていることは、森は一人の力では守れないということです。

「民官産学」。これは、緑のダム理事長の石村様が常日頃仰っている言葉です。森に関わるすべての人たちが協力をすること。その重要性を理解しつつも、目の前の作業に追われ、なかなか初めの一歩を踏み出せない日々が続いていました。しかし、10月26、27日に予定されている麻布大学学園祭、さらに11月3日に予定されている小原本陣祭という場で、相模湖を大切に思う地元の方々、真摯に活動をされている緑のダムの方々、相模原で自然との共生を目指す麻布大学が近づける場を見つけることが出来ました。今回はそのご報告をさせていただきます。　また、小原本陣祭では、実行委員長の中里様からのご提案で、大名行列に麻布大学馬術部の馬を使っていただくことになりました。馬術部顧問の佐原先生、部長の清水さんも主旨にご理解いただき、大変喜んでいただけました。お二人には、10月20日の嵐山での定例活動にも参加していただきました。本陣祭をきっかけにして、森林を愛する方々の輪が広がっていきます。きっと、ここから何かが始まっていく。そんな予感が胸に溢れています。

民官産学。森を守るためには、それら全てが密接に繋がっていかなければなりません。私たちForestNova☆は、これからも、その架け橋になれるように四年間では終わらない活動を続けて行きます。

淺野　雅樹（Forest Nova）

[報告３]
森林・林業の復権に向けて

活動開始して１６年目をむかえる本年の「第１１回通常総会（６月２０日開催）」で「これから１５年の活動目標：「森林・林業の復権・改革、第１期」を採択しました。６月３０日には、麻布大学と学術交流協定を締結し、来る１０月２７日に行う協定締結記念講演準備などと並行して９月４日、神奈川県知事時代から「森林・林業の再生」に取り組んでおられる松沢成文議員（参議院）にお会いしてお考えを聞きました。松沢氏は引き続き課題にしており、「森林・林業再生議員連盟」のようなものを考えているとのことでした。既に数名の同志が集まりかかっているそうで、市民の下支えがあればこそだと協働の方向を取る事としました。

「ＮＰＯ法」は特定の政治団体・宗教団体・暴力団などとの交流を禁じていますが、憲法が保証する言論の自由から運動としての政治に関わる事は禁じていません。良い例が「任意団体：市民活動を支える会（松原明さん）」は、政治ロビー活動を大いに頑張って「ＮＰＯ法」を1998年12月に法律として国会で採択させました。現在は、「ＮＰＯ法人シーズ」としてＮＰＯ活動の質のレベルアップと並行して昨年、改定法を成立させました。

「森林・林業の復権」は国家的な事業です。「民+産+官+学・・・全ての人々との協働」でなければ成しえない事業です。この運動は、国の制度にまで持ち込まねば本物になりません。当会の会員にして指導して下さっている酒井秀夫先生は川上から都市に向けて木材流通の途を開く提案をしておられますが、早大の椎野潤先生は、川下都市部から川上に向けて建築維新を唱えていらっしゃいます。木材を都市に繋ぐ「サプライチェーン」の構築です。近々、このお二人をむかえて勉強会を開き「森林・林業の復権運動」に道筋を付ける計画も立てています。

石村　黄仁（本会、代表理事）

[コラム]「森の話」第8回 野菜と野生植物(2)

前回の掲載からだいぶ間が空いてしまいました。本年２月号の続き「野菜と野生種との違い」についてお話しましょう。

まず、誰もが思い当たるのは植物の器官が大型化しているということ。イモ類では地下部の茎や根が大きく肉質になっています。また根菜類、例えばダイコンでも根が異常に肥大し、水分、養分に富むものになっていますが、野生種の根は固く長いそうです。根以外にもキャベツやハクサイ、ブロッコリーのように葉や茎が大きく、柔らかくなったものもあります。人間にとっては美味しく、食べ応えがある一方、植物としては極めてアンバランスな形をしているといってよいかも知れません。

次に生育の一斉化が挙げられます。野菜ではありませんが、イネやコムギなどの穀類を例にとってみましょう。

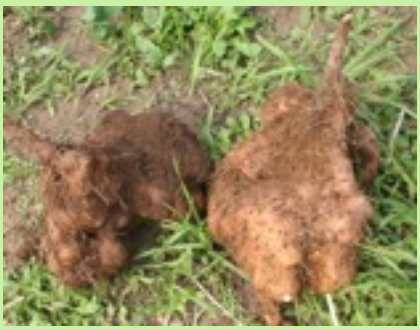
野生種では生育の長い期間にわたって分げつ（株別れ）と穂の成熟が見られます。これに対し、栽培種ではより短期間に分げつが起こり、一株につく多くの穂の成熟は一様になります。前者は種子の散布に、後者は収穫に好都合な性質です。

種子散布といえば、野生のイネでは種子が熟すと穂から脱落してしまいますが、栽培種では脱落しないという大きな違いもあります。種子（米）がばらばらと落ちてしまっては農家にとっては具合が悪いので、この性質はあくまでも収穫を意識して選択・選抜されてきたものといえるでしょう。ただし、これでは子孫を残す上で不利になることは明らか。それ故、人の手助けが必要となるのです。

最後に種子休眠性があります。種子が土の中でじっと眠っている性質です。野生植物の多くはこの性質を持つので、何年にもわたって徐々に発芽してきます。畑の雑草をいくら抜いても、後から後から生えてくるのはこのためです。一方、栽培種では休眠能力が低下しているため、種を播けば一斉に発芽するのが普通。そうでないと農家は困ります。

自然環境には旱魃や冷害など、植物にとって不都合な事態がしばしば生じます。その時、すべてが発芽した状態であるなら絶滅は避けられないでしょう。しかし、種子の状態であればやり過ごすことが可能です。種子休眠性とはそうした環境の不測の変化に対応し、絶滅を回避するための植物の知恵に他なりません。

ふだん私たちの食卓を賑わす野菜、そしてそのルーツとなる野生種。人との長く深い関わりの中で、両者がどれほど隔たったものになってしまったか。ここにも植物たちの不思議を見る思いです。

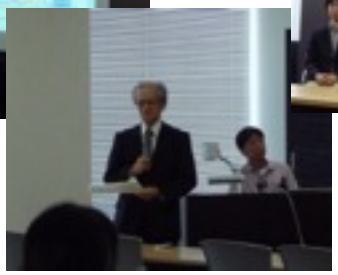


内野　郁夫（本会、理事）

[事務局からの
お知らせ、お願い]

麻布大学にて講演を行いました。

１０月２７日日曜日の麻布大学学園祭において本会と同大との連携協力に関する包括協定を記念した講演を行いました。写真でご紹介します。



会員コーナー

●会員のコーナーでは、皆さんの自由なご意見やご提案をお願いいたします。下記の専用メールアドレスか、事務局FAXまでご連絡ください。また、こちらのコーナーへの投稿や写真の提供もお待ちしております。

●通帳からですと振り込み手数料が掛かりません。
領収書はゆうちょ銀行等の発行する領収書をご利用下さい。
また、新規入会の方は、住所、電話番号を事務局にお知らせください。
振込の際は局の振込用紙に記号、番号を記載し、振込者の情報を記入して、機械操作にてお振り込みいただけると助かります。

世田谷郵便局　（記号）10000-（番号）65791651

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合してください。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食；自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

NPO法人
緑のダム北相模

急がず、無理せず、楽しく、休まず、
ボチボチと・・。
そして、沢山の参加で森は、良くなる。
（台風の日は勉強会開催。１６年間、
一日も休まず“継続は力”。）

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
事務局：154-0023　東京都世田谷区若林３－３５－９
発行人：NPO緑のダム北相模　事務局 Tel&Fax　03－3411－1636
ＵＲＬ：http//www.midorinodam.jp
E-mail：info●midorinodam.jp　●を＠に変更して使用してください
corner●midorinodam.jp　会員コーナー専用アドレス

協働団体：セブン-イレブン記念財団、相模原市（市民協働推進課）、
東海大学付属望星高等学校、生命の森宣言・東京
支援団体：WWF JAPAN、イオン財団、市民社会チャレンジ基金、
神奈川県建具協同組合、JFEメカニカル、東急コミュニティ、
マルモ出版